

宮城県文化財調査報告書第241集

大天馬遺跡・後沢遺跡

—みやぎ県北高速幹線道路関連遺跡調査報告書Ⅱ—

平成28年3月

宮城県教育委員会

大天馬遺跡・後沢遺跡

—みやぎ県北高速幹線道路関連遺跡調査報告書Ⅱ—

序 文

平成23年3月11日に発生した東日本大震災から5年が経ちました。復興は、世界と全国の協力をいただきながら着実に進んできました。今後ともその歩みを止めることなく進んでいかなければなりません。宮城県教育委員会では、文化庁より示された【東日本大震災からの復旧・復興事業の円滑な推進と埋蔵文化財の両立を図るための埋蔵文化財の取り扱いに係る基本方針】に基づき、発掘調査基準の弾力的運用と発掘調査体制の強化を図っています。試掘調査成果などをもとにした事業者との的確な調整、工事による遺構への影響に応じた調査の簡略化、全国から自治法派遣による埋蔵文化財専門職員の応援も得て調査体制を強化するなど、調査期間の短縮を行っています。今後とも調査の早期終了と復興事業の円滑な推進に向け努力していきたいと考えています。

本書は、宮城県北部高速幹線道路栗原一登米線建設工事に先立って実施した栗原市大天馬遺跡と後沢遺跡の発掘調査報告書です。遺跡の保護と復興事業の円滑な推進を図るために重要な基礎データであるとともに、今回の発掘調査により得られた貴重な成果が、広く県民の皆様や各地の研究者に活用され、地域の歴史解明の一助になれば幸いです。

最後になりますが、派遣環境が厳しい中、埋蔵文化財専門職員を派遣いただいた全国の自治体、震災復興に関わる多忙な業務の中、遺跡の保護に理解を示され、発掘調査に際して多大なるご協力をいただいた関係機関の方々、地元住民の皆様に対し、厚く御礼申し上げる次第です。

平成28年3月

宮城県教育委員会

教育長 高橋 仁

例　　言

1. 本書は、宮城県土木部北部土木事務所栗原地域事務所との協議に基づき実施した、みやぎ県北高速幹線道路4期区間建設に伴う大天馬遺跡と後沢遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、宮城県教育委員会が主体となり、宮城県教育庁文化財保護課が担当した。
3. 発掘調査および報告書の作成に関して、栗原市教育委員会からご指導・ご協力を賜った。
4. 本書の第2図は、国土地理院発行1/25,000地形図「金成」「築館」を複製して使用した。
5. 本書における土色の記述に当たっては、「新版標準土色帖 1994年版」(小山・竹原 1994)を使用した。また、土層に含まれる基本層IV～VI層由来の含有物について、地山粒：径5mm以下、地山小ブロック：径5～10mm、地山ブロック：径10mm以上で表記する。また、IX層由来の含有物について白色粘土と表記する。
6. 測量基準点の座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標X系による。使用した測量基準点は、以下の通りである。

KA1-1 : X = -139959.067 Y = 17845.607 NO. 2 : X = -139963.339 Y = 17856.754

NO.32 : X = -140099.903 Y = 18438.125 NO.33 : X = -140105.994 Y = 18457.175

7. 本書で使用した遺構記号は、以下の通りである。
SI：堅穴住居跡 SB：掘立柱建物跡 SK：土坑 SD：溝跡 P：ピット・小穴・柱穴
8. 遺構平面図・断面図にはそれぞれスケールを付しているが、縮尺は原則として以下の通りである。
遺跡周辺地形図：1/20,000、調査区位置図：1/6,000、1/2,000、遺構配置図：1/500（大天馬遺跡）、1/300（後沢遺跡）、遺構ごとの平面図・断面図：1/60
9. 遺物図版にはそれぞれスケールを付しているが、縮尺は原則として1/3である。
10. 土器の説明では、製作においてロクロを使用しているものを「ロクロ調整」、ロクロを使用していないものを「非ロクロ調整」と表記する。
11. 土器実測図のうち、土師器内面にグレー塗り表示してあるものは、内面が黒色処理されていることを示す。
12. 本文中で使用した「灰白色火山灰」は、10世紀前葉頃に降下した十和田a火山灰と考えられている（白鳥1980、井上・山田1990）。
13. 遺物の写真撮影は、株式会社アートプロフィールに委託して行った。
14. 遺構・遺物の整理は、千葉直樹、黒田智章、須田正久（群馬県派遣職員）が行った。
15. 本書の執筆・編集は、調査担当者との協議のうちに千葉直樹が行った。
16. 発掘調査の記録や出土遺物は、宮城県教育委員会が保管している。

目 次

序文

例言

調査要項

I 遺跡の概要

1. 遺跡の位置と地理的環境.....	1
2. 周辺の遺跡.....	1

II 調査に至る経緯と調査経過.....	3
----------------------	---

III 調査方法と基本層序.....	4
--------------------	---

IV 大天馬遺跡

1. 遺跡の概要.....	9
2. 発見された遺構と遺物.....	9
3. 考 察.....	13

V 後沢遺跡

1. 遺跡の概要.....	19
2. 発見された遺構と遺物.....	19
3. 考 察.....	23

VI まとめ.....	25
-------------	----

引用・参考文献.....	26
--------------	----

写真図版.....	27
-----------	----

報告書抄録

I 遺跡の概要

1. 遺跡の位置と地理的環境

大天馬遺跡は、宮城県栗原市志波姫堀口大天馬ほか、後沢遺跡は栗原市築館萩沢に所在する（第1図）。市の中心部は、奥州街道沿いにあたる旧築館町で、遺跡は市街中心部から北東に約2km離れた地点に位置している。地形的に見ると、遺跡周辺には、奥羽山脈から樹枝状に派生して延びる陸前丘陵の一部である築館丘陵とそれにつながる追川低地が広がっている。丘陵と追川低地との比高は、10~20mで、築館丘陵は、追川とその支流によって複雑に開析されている。遺跡は、追川支流の大江堀川と荒川に南北を挟まれた丘陵平坦部と河岸段丘に立地し、丘陵北側と南側は急斜面となっている。また、後沢の地名が示す通り、丘陵にかつて沢が入り込んでいた痕跡が地形に残されている（第2図）。

大天馬遺跡の範囲は、東西約450m、南北約300mで、調査対象範囲はこの中の北東部にある。後沢遺跡の範囲は、東西約100m、南北約170mで、調査対象範囲はこの中の南部にある。両遺跡の調査対象範囲の現況は水田となっている。

2. 周辺の遺跡

本遺跡の周辺では、旧石器時代から近世に至る多数の遺跡が発見されており、なかでも縄文時代と奈良・平安時代の遺跡の分布が濃密である（第2図）。詳細は宮城県文化財調査報告書第231集『大天馬遺跡』を参照されたい。旧石器時代の遺跡としては、伊治城跡（築館町教育委員会2004）、淀遺跡（宮城県教育委員会2001）、御駒堂遺跡（宮城県教育委員会2014）があり、後期旧石器時代の剥片が出土している。縄文時代の遺跡としては、嘉倉貝塚（宮城県教育委員会2003、築館町教育委員会2003）、鰐沢遺跡（築館町教育委員会2005）、宇南遺跡（宮城県教育委員会1979）などがある。このうち嘉倉貝塚では縄文時代前期後葉～晩期後葉にかけての集落跡や墓域が検出され、前期後葉から中期初頭には環状集落が形成されていたことが明らかとなっている。また、鰐沢遺跡では縄文時代中期末の複式炉を伴う竪穴住居跡が発見されている。弥生時代の遺跡としては、宇南遺跡が知られており、弥生時代後期の遺物が出土している。古墳時代では、伊治城跡（栗原市教育委員会2009）で古墳時代前期の居館区画溝跡や古墳周濠が確認されているほか、大仏古墳群（築館町史編纂委員会1976）がある。また、平成26年度に調査された入ノ沢遺跡では狭い丘陵平坦部に区画施設を伴う集落跡が検出されている。住居跡内からは国内最北となる古墳時代前期の銅鏡が4面出土し、古墳文化の広がりを考えるうえで注目される（宮城県教育委員会2014）。

奈良・平安時代の遺跡は発見されている数が多い。特筆すべきものとして、本遺跡の北約3kmに位置する伊治城跡（築館町教育委員会1988など）が挙げられる。伊治城跡は、「続日本紀」の神護景



第1図 大天馬遺跡の位置



No.	遺跡名	立地	種別	時代	No.	遺跡名	立地	種別	時代
1	大天馬遺跡	段丘	集落	古代	19	驅切長板道跡	丘陵	散布地	繩文・古代
2	後沢遺跡	丘陵	集落	古代	20	長者原道路	丘陵	集落	古墳前・中・奈良・平安
3	伊治城跡	段丘	溝・濠・壁・礎	古墳・平安・中世	21	祠敷設道路	自然堤防	散布地	繩文・古代
4	入の沢道路	段丘	集落	古墳時代前期	22	姉南御穴墓群	丘陵斜面	横穴墓	古墳後
5	御胸堂遺跡	段丘	集落	繩文・弥生・古墳～近世	23	上船跡	丘陵	城船	平安
6	下沢跡	丘陵	集落	繩文中・弥生・古代	24	大沢横穴墓群	丘陵斜面	横穴墓	古墳後・古代
7	源光道路	丘陵	散布地	繩文中・古代・近世	25	刈敷防風道路	自然堤防	散布地	繩文中・晚・古代
8	原田道路	丘陵	集落	繩文中・古代	26	佐野道路	丘陵	集落	弥生・古代
9	高田山道路	丘陵	散布地	繩文・古代	27	糠塚道路	段丘	集落	弥生・奈良・平安
10	鶴沢道路	丘陵	集落	繩文後・古代・中世	28	大門道路	段丘	集落	繩文・奈良・平安・中世
11	木戸道路	丘陵	集落	繩文中・古代	29	狐塚道路	段丘	窓跡	古代
12	佐内屋敷道路	丘陵	集落	繩文中・奈良・平安	30	熊谷道路	段丘	集落	繩文・古代
13	鶴ノ丸道路	段丘	城船・集落	繩文・弥生～近世	31	山ノ上道路	丘陵	集落	繩文・古代
14	吹付道路	段丘	集落	古代	32	照越台道路	丘陵斜面	散布地	繩文中～晚・古墳・古代
15	淀道路	丘陵	散布地・集落	但石畠・古墳・盆地・平安・中世	33	玉秋台道路	丘陵	散布地	繩文中～晚・古代
16	宇南道路	段丘	城船・集落	繩文・奈良・平安	34	筋倉貝塚	丘陵	貝塚	繩文前～晚・弥生・古代
17	堂の沢道路	段丘	散布地	古代	35	小山道路	丘陵	散布地	繩文・古代
18	大仏古墳群	丘陵斜面	円墳	古墳後・古代	36	青野道路	段丘	散布地	古代

第2図 大天馬遺跡、後沢遺跡と周辺の遺跡

雲元年（767）に律令政府が古代東北經營のために造営した城柵の一つで、国内初となる野の「機」が出土したことでも著名である。集落跡では、木戸遺跡（宮城県教育委員会1980）、原田遺跡、下萩沢遺跡（宮城県教育委員会2009）、御駒堂遺跡（宮城県教育委員会1982）、山ノ上遺跡（宮城県教育委員会1980）などがある。このうち御駒堂遺跡は、7世紀末～9世紀の集落跡で、関東地方と強い共通性がある土器や遺構がまとまって発見されている。8世紀前半に行われた律令国家による栗原郡の建都政策に伴う移民の集落跡と考えられている。原田遺跡、下萩沢遺跡では伊治城存続期の掘立柱建物跡、堅穴住居跡が、区画施設を伴って発見されている。焼失した住居内からは鉄製の武器類が出土しており、伊治城との関連が注目されている。生産遺跡には、須恵器を焼成した岩ノ沢窯跡や狐塚遺跡、須恵器と瓦を併焼した小迫神社窯跡があり、これらの製品の一部は伊治城に供給されたと推定されている。墳墓としては、二迫川左岸の丘陵上に44基の円墳からなる鳥矢ヶ崎古墳群（栗駒町教育委員会1972）がある。昭和46年に、このうちの2基が調査され、2号墳の組合せ木棺内および覆土から青銅製鎧帶金具や蕨手刀などが出土している。また、二迫川の北側丘陵部の南斜面では、大沢横穴墓群と姉歿横穴墓群が確認されており、これらは本州の内陸部に位置する横穴墓として最北のものとされている。

中世の遺跡では、鶴ノ丸遺跡（宮城県教育委員会1981）で鎌倉時代後期～江戸時代の館跡が発見されており、このほかにも照越館跡、萩沢城跡、嘉倉館跡などが知られている。近世の遺跡としては、御駒堂遺跡で掘立柱建物跡が確認されているほか、鶴ノ丸遺跡、宇南遺跡でも当該期の遺構・遺物が発見されている。

II 調査に至る経緯と調査経過

旧築館町内を縱断する国道4号の交通混雑の緩和と市街地周辺部の活性化等の理由により、旧築館町赤坂から、市街地を東側に迂回し旧築館町城生野に至る総延長約7km、路線幅50m、両側4車線の一般国道4号築館バイパスの建設計画が立案され、昭和56年都市計画決定された。これを受けて、宮城県教育委員会は、平成14年9月、遺跡分布調査並びに試掘調査を実施し、古代の土器の散布が認められた大天馬遺跡が新規登録されることとなった。平成21年から23年に宮城県教育委員会が発掘調査した結果、奈良時代の堅穴住居跡2軒、時期不明の掘立柱建物跡1棟、土坑5基などを検出している。

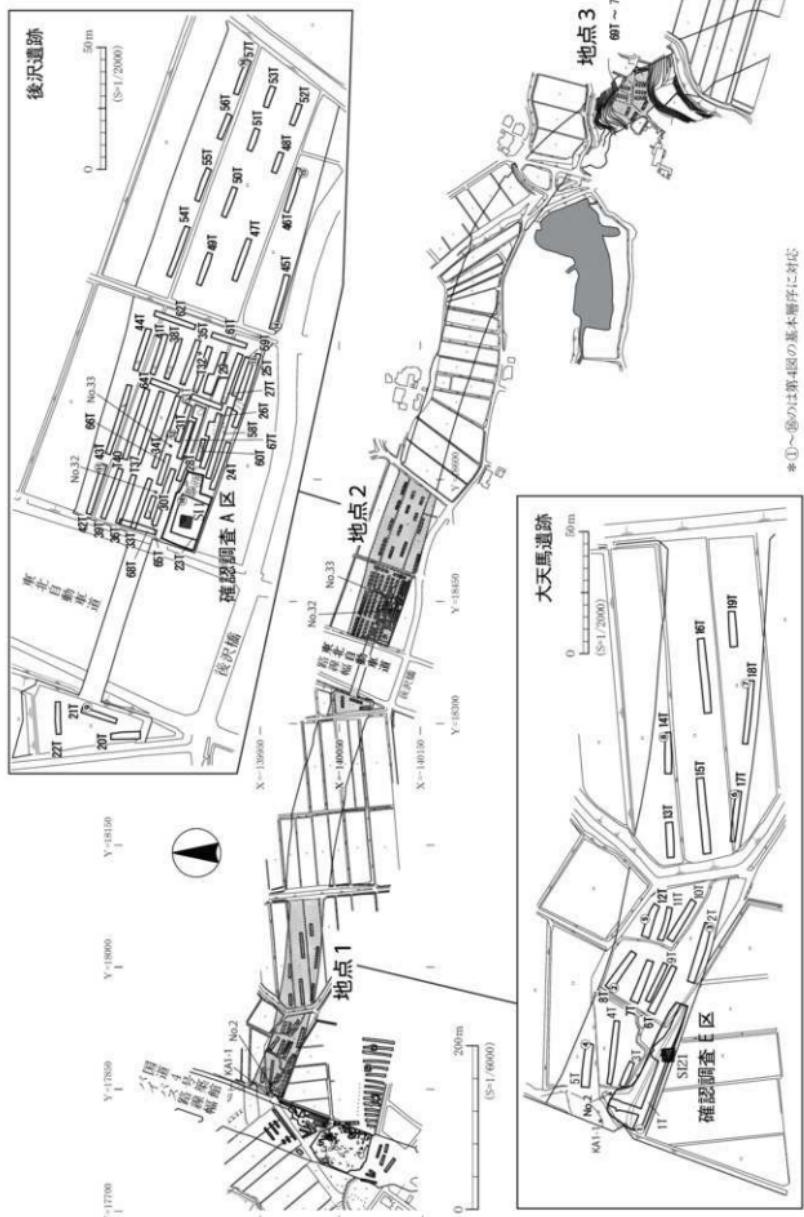
一方、平成6年には、みやぎ県北高速幹線道路事業が計画された。この事業は、前述の国道4号築館バイパスを起点とし、登米IC付近の登米市中田町浅水に至る路線を4期に分割して整備するもので、1期区間はすでに供用されている。なお、この路線区域に立地する嘉倉貝塚が平成11年から14年に調査されている（宮城県教育委員会2003）。東日本大震災後の平成23年11月21日、当道路が復興支援道路として事業化され、国道4号築館バイパス接続部分から栗原市築館嘉倉に至る4期区間の造成が進められることになった。この計画路線区域に大天馬遺跡が立地するため、平成26年2月、宮城県教育委員会は、宮城県土木部北部土木事務所栗原地域事務所に対し、計画地内に周知の遺跡が存在することと未発見の遺跡が存在する可能性が高いことから、遺跡の取り扱いについての協議を申し入れ、

同年3月遺跡分布調査を行った。その結果、大天馬遺跡とその隣接地（地点1）、東北自動車道が縦貫する丘陵部（地点2）、鰐沢遺跡と同丘陵の先端部（地点3）で遺物の散布が認められた。このため平成27年4月、地点1と地点2について試掘調査を実施した結果、地点1で古代の竪穴住居跡1軒、地点2で古代の竪穴住居跡1軒、時期不明の土坑、溝跡などが検出された（第3図）。これを受けて、同年4月28日、宮城県教育厅文化財保護課と宮城県土木部北部土木事務所栗原地域事務所、栗原市とが対応について協議を行い、路線の変更が困難であることから、やむを得ず建設工事前に記録保存のための発掘調査を実施することになった。地点2については新発見となるため、後沢遺跡を古代の集落跡として新規登録した。なお、地点3については、10月5・6日に試掘調査を行ったが、遺構、遺物は発見されなかった。大天馬遺跡の確認調査は、平成27年5月7日から実施した。工事予定区域で竪穴住居跡（SI21）が検出された1トレンチ付近（E区）を拡張し、遺構の広がりを確認したが検出されなかった。このため竪穴住居跡について内容確認調査を実施し、実測図の作成、写真記録を行って、5月14日に埋め戻し、調査を終了した。10月7・8日にはコンクリート側溝埋設部分について事前調査を行った。後沢遺跡の確認調査は、平成27年5月15日から実施した。工事予定区域で竪穴住居跡（SI1）が検出された23トレンチ付近（A区）を拡張し、遺構の広がりを確認したが検出されなかった。このため竪穴住居跡と土坑、溝跡の一部について内容確認調査を実施し、実測図の作成、写真記録を行って、5月21日に埋め戻し、調査を終了した。

III 調査方法と基本層序

調査地点では、1950年代以降の農地整備により旧地形が改変されているところが多く、削平の著しい箇所や盛土の厚い箇所が見受けられた。このため本来の地形が予想しにくいことから、試掘調査では密にトレンチを設定して遺構の広がりを把握した。対象地は用地取得前の水田畦畔が残存していたため、計画道路の境界線または畦畔の方向に合わせて、地点1（大天馬遺跡とその隣接地）で19本、地点2（後沢遺跡とその隣接地）で49本、地点3で9本の合計77本のトレンチを設定し、試掘調査を行った。表土排除は、バケット容量0.45m³のバックホーで実施し、遺構確認面である地山のV層上面で人力による遺構検出作業を行った。

宮城県では東日本大震災からの復興事業に係る埋蔵文化財発掘調査について、発掘調査基準の弾力的運用方針を示し、盛土による工事で遺構が破壊されない遺跡については、範囲・内容の確認調査に留め、発掘調査の迅速化を図っている。この方針に基づき、大天馬遺跡と後沢遺跡については、遺構が検出された地点について調査範囲を広げ、遺構の一部を掘り下げる内容の確認調査を実施した。記録にあたっては、遺構の平面実測は、計画道路のセンター杭を基準とし、トータルステーション及び電子平板、縮尺1/10または1/20手実測を併用して行った（基準とした座標値は例言を参照のこと）。遺構の断面実測は、縮尺1/10または1/20の手実測で行った。また、記録写真は1800万画素の35mm一眼レフデジタルカメラで撮影した。



第3図 調査地点とトレーンチの位置

大天馬遺跡と後沢遺跡の調査地点は、標高30mほどの丘陵北辺とその北側から東側に広がる段丘面上に立地する。現況は、水田として利用されている。試掘調査の結果、変更を受けている地点が多いことが明らかとなった。特に後沢遺跡東側の段丘面（45～57トレンチ）は盛土が1m程度認められる。大天馬遺跡と後沢遺跡では地表面で約2m後沢遺跡が低いが、基本層序は概ね共通し、遺構確認面はV層またはVI層である（第4図）。

I層：灰黄褐色（10YR5/2）シルト。表土。層厚10～20cm。

II層：灰黄褐色（10YR5/2）シルト。盛土。層厚10～20cm。III層以下由来のブロックを多く含む。

III層：暗褐色（10YR3/3）シルト。調査区内で旧地形の残存がよい地点に部分的に見られる。層厚10cm程度。

IV層：灰黄褐色（10YR4/2）粘土質シルト。III層とVI層の漸移層で、III層に似る。層厚10cm程度。

10～12トレンチではⅣ層との漸移層で、III層に似る（IV'層）。層厚10cm程度。

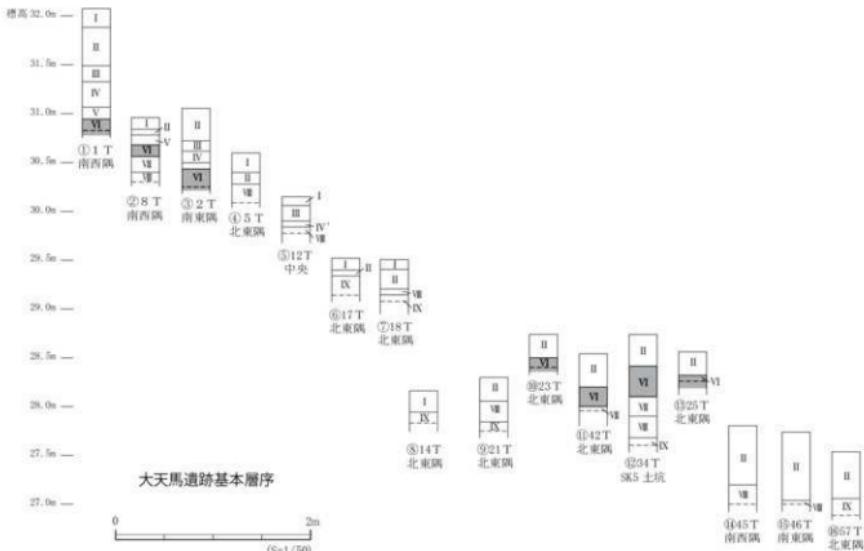
V層：にぶい黄色（25Y6/3）粘土質シルト。III層とVI層の漸移層で、VI層に似る。層厚10cm程度。

VI層：明黄褐色（10YR7/6）シルト質粘土。層厚30cm程度。いわゆる地山と呼称する地層。

VII層：浅黄橙色（10YR8/3）砂質シルト。層厚20cm程度。

VIII層：明黄褐色（10YR4/4）褐色砂。層厚20cm程度。

IX層：灰白色（10YR8/2）粘土。住居跡カマドの構築材に使われた白色粘土はこの層から採取されたと思われる。層厚は10cm以上。



第4図 基本層序

IV 大天馬遺跡

調査要項

遺跡名：大天馬遺跡（宮城県遺跡地名表登録番号49023）

遺跡記号：RW

所在地：宮城県栗原市志波姫堀口大天馬ほか

遺跡種別：古代の集落跡

調査原因：みやぎ県北高速幹線道路事業

調査主体：宮城県教育委員会

調査担当：宮城県教育庁文化財保護課

調査協力：宮城県土木部北部土木事務所栗原地域事務所 栗原市教育委員会

調査対象面積：約4,200m²

調査面積：約1,600m²（＊遺跡範囲確認のための隣接地含む）

調査期間：平成27年4月20日～4月30日（試掘調査）

平成27年5月7日～5月14日、10月7・8日（確認調査）

調査員：千葉 直樹・黒田 智章・須田 正久

1. 遺跡の概要

大天馬遺跡は、東西約450m、南北約300mの範囲の丘陵平坦面および河岸段丘上に立地し、現況は水田や宅地、国道4号バイパス道路となっている。遺跡は平成21年度と23年度に宮城県教育委員会によって調査され、8世紀代の竪穴住居跡2軒、時期不明の掘立柱建物跡1棟、土坑5基、溝跡3条などが検出された。また、平成21年度に栗原市による確認調査で、8世紀代の竪穴住居跡3軒が検出されている。これらの調査成果から大天馬遺跡は奈良時代の在地に一般的にみられる集落跡と考えられている（宮城県教育委員会2012）。

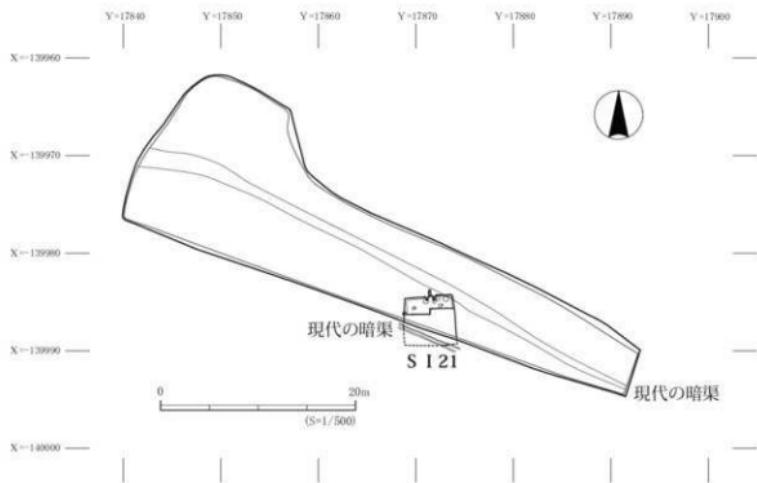
2. 発見された遺構と遺物

今回の調査で発見された遺構は、竪穴住居跡1軒である（第5図）。丘陵の北東辺に竪穴住居跡を検出したが、そこから標高の下がる段丘面では遺構は確認されなかつた（第3図）。なお、VI層またはVII層が残存していない地点は著しい削平を受けており、遺構は確認されなかつた。

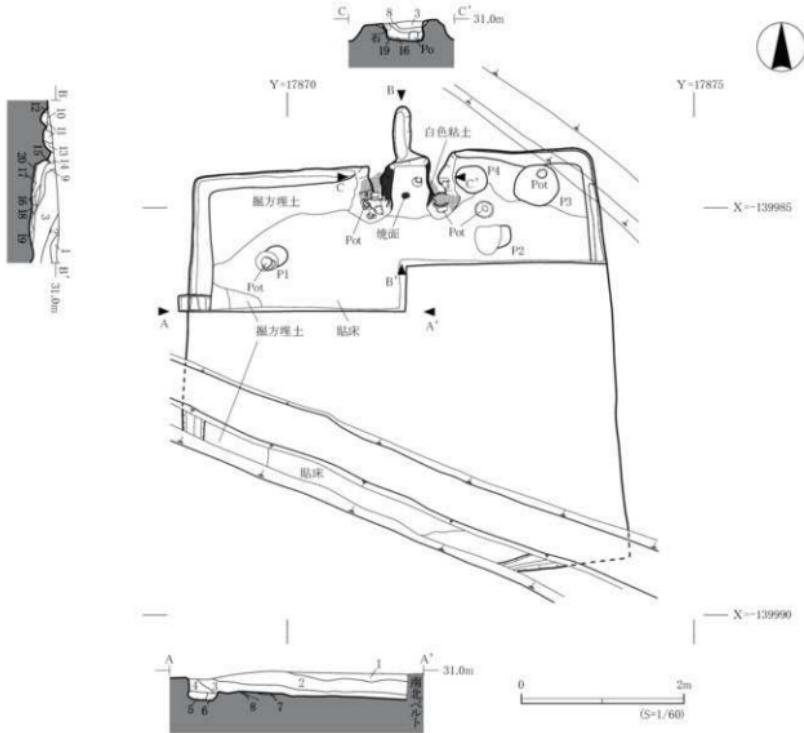
遺物は、整理用テンバコで3箱分出土している。その大半が、竪穴住居跡から出土した土師器である。そのほかには竪穴住居跡を壊して造られた現代の暗渠から土師器片が出土しており、これも本来竪穴住居跡に帰属すると考えられる。また、竪穴住居跡カマドから弥生土器片が出土している。

（1）S121竪穴住居跡（第6図 図版3・4）

E区南側に位置する。V層上面で検出した。他の遺構との重複関係はないが、北東部の壁を現代の暗渠に壊されている。遺構の南西部は、調査区外に延びる。住居跡北半部について一部掘り下げを行って調査した。平面規模は、東西が北辺で4.9m、南北が東辺で5.0m、平面形は方形と推定される。方向は、東辺でみると北で西に約3°偏している。堆積土は4層で、黒褐色粘土質シルトを主体とする。



第5図 大天馬遺跡確認調査 E区と遺構配置



番	土色	土性	混入物など	備考
1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	地山粒を含む。	自然堆積
2	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	地山ブロックを多く含む。	自然堆積
3	黒色 (10YR2/1)	粘土質シルト	地山小ブロックを含む。	自然堆積
4	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	地山ブロックを多く含む。	自然堆積
5	褐色 (10YR4/4)	粘土質シルト	地山ブロックを多く含む。	壁材抜取穴
6	明黄褐色 (10YR6/6)	粘土質シルト	地山ブロックを主体とする。	周溝掘方理土
7	褐色 (10YR4/4)	粘土質シルト	地山ブロックを非常に多く含む。白色粘土粒を含む。	貼床
8	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質シルト	地山ブロックを非常に多く含む。	掘方理土
9	灰黄褐色 (10YR5/2)	粘土質シルト	黄褐色粘土ブロックを多く含む。白色粘土粒を含む。	カマド崩落土
10	黒褐色 (10YR3/1)	粘土質シルト	地山粒を含む。黒色土粒を僅かに含む。	カマド煙道堆積土
11	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	粘土質シルト	黄褐色土ブロックとロームブロック、粒が混在する。	カマド煙道堆積土
12	黒褐色 (10YR3/1)	粘土質シルト	地山粒と地山粒を少し含む。	カマド煙道堆積土
13	黄色 (25YR8/8)	粘土質シルト	地山ブロック主体。僅かににぶい黄褐色土粒を含む。	カマド煙道堆積土
14	褐灰色 (10YR6/1)	粘土質シルト	燒土粒を含む。	カマド煙道堆積土
15	灰白色 (10YR7/1)	粘土質シルト	白色粘土ブロックを多く含む。	カマド煙道堆積土
16	暗赤褐色 (25YR3/3)	粘土質シルト	燒土小ブロック、燒土粒を少し含む。	カマド自然堆積
17	赤褐色 (5R4/8)	粘土質シルト	燒土ブロックを含む。燒土粒を多く含む。	カマド自然堆積
18	黄橙色 (10YR8/6)	粘土質シルト	地山粒を多量に含む。燒土粒を少し含む。	カマド自然堆積
19	灰黄褐色 (10YR4/2)	粘土質シルト	黒色土ブロックを含む。燒土粒を少し含む。	カマド自然堆積
20	暗赤褐色 (5YR3/3)	粘土質シルト	燒土粒を多量に含む。	カマド使用時堆積土

第6図 大天馬遺跡S121竪穴住居跡 平面・断面

壁は、西壁で床面から約20cm残存し、ほぼ垂直に立ち上げる。

床面は、平坦で、ほぼ全面を貼床し、壁際については掘方埋土と地山を床としている。貼床の厚さは5~7cm、掘方埋土の厚さは10~25cmで東側が深く掘り込まれている。

主柱穴と考えられる柱穴を2個確認した(P1・P2)。平面形は、長軸30~40cm、短軸20~30cmの楕円形で、柱材は抜かれている。柱間寸法は、P1-P2間で約200cmである。柱穴の掘方埋土は、地山小ブロックを含む黒褐色粘土質シルトで、柱抜き取り穴埋土は、地山ブロック、焼土粒を含む黒褐色粘土質シルトである。

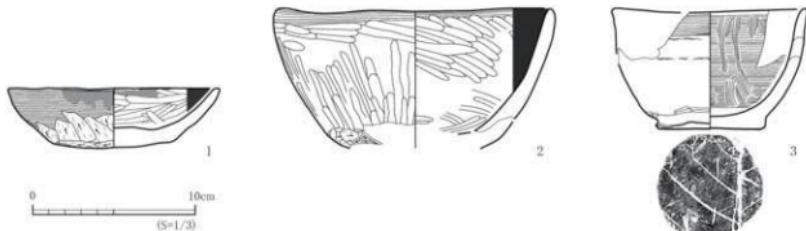
カマドは、北壁中央に造られており、両側壁、煙道が残存している。燃焼部は、幅50cm、奥行き75cmで、底面は平坦である。中央付近に直径約10cmの焼面がある。カマド本体は、地山を削り出して基礎を造り、白色粘土と黒褐色シルトを積み上げて構築している。また、焚口に土師器壺を倒立させて据え、芯材にして補強している。右側壁は、長さ75cm、幅45cm、高さ15cm、左側壁は、長さ70cm、幅50cm、高さ20cmが残存している。燃焼部内の堆積土は、地山小ブロック、焼土ブロックを多く含む赤褐色または暗褐色粘土質シルトで、カマド構築材の崩落土である白色粘土小ブロックを含む。また、燃焼部右側壁に寄った位置で支脚と考えられる土師器壺底部が倒立した状態で出土した。燃焼部底面より4cm上(第6図17層上面)で検出しており、本来の位置から動いていると考えられる。

煙道は、幅約20cmで、住居北壁より72cm北側に延びる。煙出しビットは確認されなかった。煙道堆積土は、黄褐色粘土小ブロック、焼土粒を含む黒褐色またはぶい黄褐色粘土質シルトである。

周溝は、カマド部分以外は壁際を全周する。周溝掘方と壁材の抜き穴を検出した。規模は、上幅34cm、下幅30cm、深さ12cmで、断面形は、逆台形である。掘方埋土は、地山ブロックを主体とする明黄褐色粘土質シルトで、壁材抜き取り穴埋土は地山小ブロックを含む褐色粘土質シルトである。

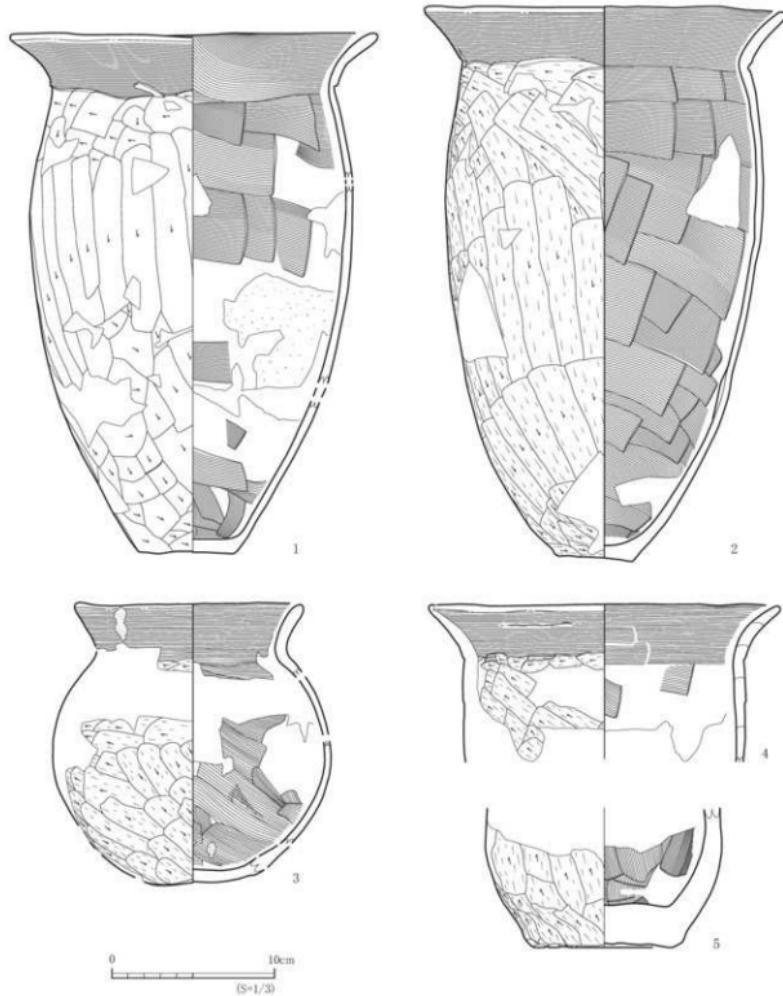
貯藏穴は、カマド東側で直径54cmの円形のもの(P3)と直径40cmの円形のもの(P4)を検出した。P3の埋土は地山小ブロックと焼土ブロックを含む暗褐色粘土質シルトで、P4の埋土は焼土ブロックを含む黒褐色粘土質シルトである。

遺物は、貯藏穴(P3)埋土上面から土師器壺(第7図1)、床面から土師器壺(同図2)、P1柱抜き取り穴上面から土師器小型鉢(同図3)、カマド構築材(第8図1~4)や支脚(同図5)に使われた土師器壺が出土している。いずれも非ロクロ調整である。



No.	種別	層位	口径	底径	器高	残存	特徴	写真図版	登録
1	土師器・壺	P2調上上面	13.0	7.0	3.7	ほぼ完形	外面:ヨコナデ→体部ヘラケツリ 内面:ヘラミガキ・黒色施釉 底面:手持ちヘラケツリ	5-1	R-15
2	土師器・壺	床面	16.7		(8.6)	口縁部・体下部	外面:ヨコナデ・体下部ヘラケツリ→ヘラミガキ 内面:ヨコナデ→ヘラミガキ・黒色施釉	5-2	R-16
3	土師器・鉢	P1柱抜穴(12.0)	6.2	7.4	口縁部5~底部		外面:ヨコナデ・体下部一部ミガキ 構み上げ痕顯著 内面:ヨコナデ→一部報方向のナデ 底部:木葉痕	5-3	R-16

第7図 大天馬遺跡S121竪穴住居跡出土土器



第8図 大天馬遺跡S121堅穴住居跡 出土土器

No.	種別	層位	口径	底径	器高	残存	特徴	写真図版	登録
1	土加器・甕	カマド芯材	22.6	6.0	32.0	ほぼ完形	外面：ヨコナデ→ヘラケズリ 内面：ヘラナデ→口縁ヨコナデ 底面：ヘラケズリ	5-4	R-15
2	土加器・甕	カマド芯材	22.2	4.8	34.1	ほぼ完形	外面：ヨコナデ→ヘラケズリ 内面：ヘラナデ→口縁ヨコナデ 底面：ヘラケズリ	5-5	R-16
3	土加器・甕	カマド芯材	14.1	6.9	17.4	口縁部 2~底部	外面：ヨコナデ→ヘラケズリ 内面：ヘラナデ→口縁ヨコナデ 底面：ヘラケズリ	5-6	R-16
4	土加器・甕	カマド芯材	(21.6)	(9.2)	(15.0)	上部	外面：ヨコナデ→ヘラケズリ 内面：ヘラナデ→口縁ヨコナデ	5-7	R-16
5	土加器・甕	カマド芯脚	8.6	(8.6)	体下部~底部	外面：ヘラケズリ 内面：ヘラナデ 底面：ヘラケズリ	5-8	R-16	

3. 考 察

(1) 遺物について

SI21堅穴住居跡出土土師器について、特徴と時期を検討したい。いずれも、カマド、床面、柱抜き取り穴からの出土で、住居構築から廃棄までの比較的短期間に使用されたものである。

壺（第7図1）は、小型で器高が浅いく、平底気味の丸底で、体部から口縁部にかけて緩やかに立ち上がる器形である。調整は、外面が口縁部ヨナデ後に体部・底部を持ちヘラケズリ、内面はヘラミガキである。内面にくすみがあり、黒色処理されていたと考えられる。

塊（同図2）は底部が剥離しているが、体部の剥離面の形状から平底と考えられる。体部から口縁部にかけて緩やかに立ち上がる器形である。調整は内外面ともヘラ磨きである。内面にくすみがあり、黒色処理されていたと考えられる。

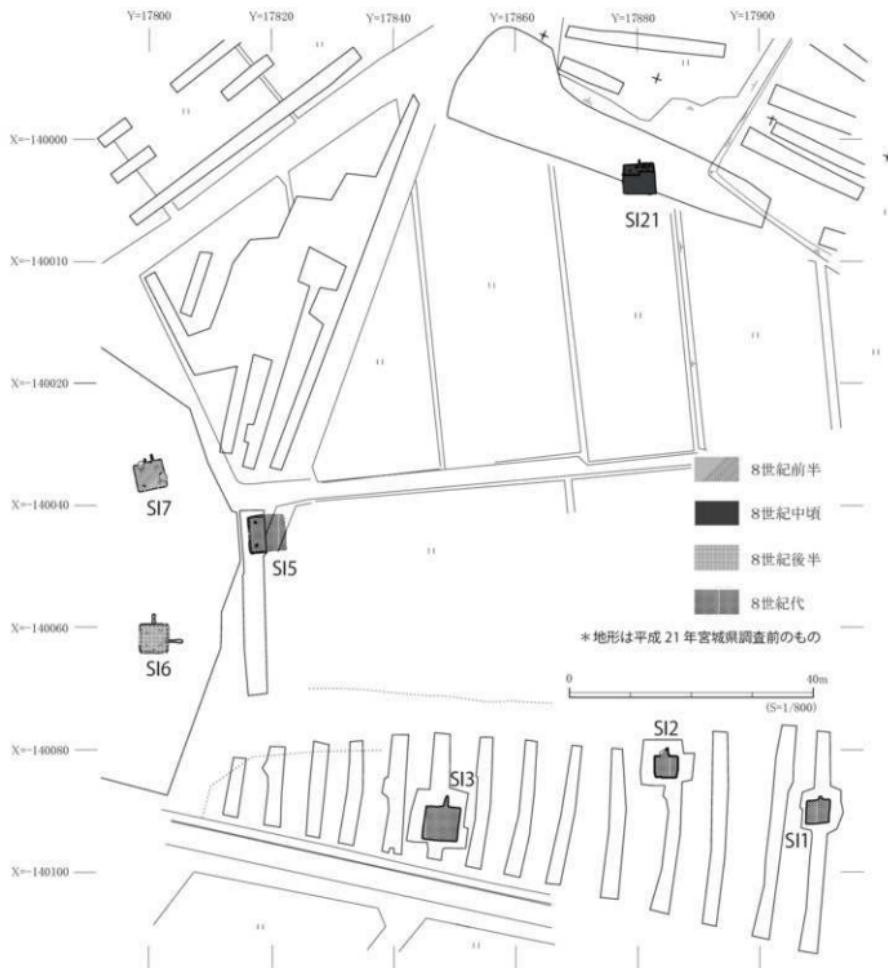
小型鉢（同図3）は、平底で、底部は軽く台状になり、胴部から口縁部にかけて内湾しながら立ち上がる器形である。底面に木葉痕がみられる。器面は、内外面ともナデでかんたんに調整され、外面には粘土の積み上げ痕が顕著に残る。底部に木葉痕が残ること、大きさの割に厚みがあること、器形が縱長であることなどから壺を成形途中で小型鉢に作り変えたと考えられる。

壺は、器形のわかるものが4点ある。第8図1・2は胴部が緩やかに内湾しながら立ち上がり、頸部で明瞭に屈曲して口縁部が強く外反し、口径に最大径を持つ砲弾形の長胴壺である。底径は非常に小さい。器面調整は、口縁部の内外面はヨコナデ、胴部外面は上部がヨコ方向のケズリ、下部はタテ方向のケズリである。内面はナデで調整されている。色調は1が橙色で、2は浅黄橙色である。同図3は胴部中央が張る小型の壺で、底部が非常に小さい。調整は口縁部がヨコナデ、胴部はケズリ、内面はナデである。色調は橙色である。同図4は口縁部付近のみの残存で、器形は、胴部上半が軽く張る筒状である。器面調整は、口縁部ヨコナデ後、胴部外面をケズリ、内面はナデである。色調は浅黄橙色である。このほか土師器壺底部（同図5）がある。底部と体部の一部が残存し、底径が大きい。体部外面はケズリ、内面はナデである。二次加熱による器面の劣化が著しい。

このような特徴をもった土器群の類例として、壺と塊については栗原市経ヶ崎遺跡SI6、SI15住居跡（高清水町教育委員会2000）、栗原市桃生田前遺跡SI3住居跡（瀬峰町教育委員会2000）、下藤沢Ⅱ遺跡1号住居跡（瀬峰町教育委員会1988）、御駒堂遺跡第22号住居跡（宮城県教育委員会1982）、大境山遺跡2号住居跡、4号住居跡（瀬峰町教育委員会1983）出土土器などがある。これらの土器は、陸奥国における奈良時代の土器型式として設定された国分寺下層式（氏家1957）の特徴と共に、8世紀中頃～後半に位置づけられている。壺については、類例として御駒堂遺跡6号住居跡、第29号住居跡出土土器があり、8世紀前半に位置づけられている。砲弾形の壺と胴部が張る小型壺は、胴部の調整にケズリが用いられ、底径が非常に小さく、色調が橙色のものが多いなど、在地の土器とは異なった特徴があり、武藏地域の土器に類似する関東系土師器と呼称されるものである。関東地方からの移民によって製作、あるいはその影響を強く受けた土器と考えられており、栗原郡では8世紀中頃まで使用されたと考えられている（村田2000、佐藤2007）。以上のように在地土器と関東系土器についての年代観を参考にすれば、SI21堅穴住居跡出土土師器の年代については8世紀中頃と考えたい。

(2) 遺構について

検出された遺構は竪穴住居跡1軒であった。竪穴住居跡の年代は、前述の出土土器の検討から、8世紀中頃と考えられる。構造についてみると、一辯の長さが約5mの方形で、カマドはほぼ真北に造られ、長い煙道が付設されている。主柱は4本、周溝はカマド部分を除き全周すると推定される。カマドは、地山を削り出して基礎を造り、土師器甕を焚口部の芯材に用いて白色粘土で構築している。



第9図 大天馬遺跡竪穴住居跡の分布状況

このような特徴はこれまでの大天馬遺跡の調査で8世紀代の中型堅穴住居跡とされたものと基本的に共通するが、関東系の土師器甕をカマド芯材としている点で異なっている。在地の伝統で造られた堅穴住居の中でも、関東の影響が強く表れているものといえる。

(3) 集落の様相について

これまでの調査で集落を構成する堅穴住居跡は7軒検出されたことになる（第9図）。堅穴住居跡が検出された調査区を概算すると約8,000m²であり、集落は非常に閑散とした状況であったと考えられる。また、発見された住居跡は、カマド本体が住居内部に造られ、長い煙道が付設される在地に伝統的な構造で、遺物は生活道具の土器類以外出土していない。このような特徴は栗原郡内の8世紀代の一般集落跡とされる、栗原市木戸遺跡、佐内屋敷遺跡、大門遺跡などと共通しており、この地域の一般的な集落として理解される。その中で、今回発見されたSI21堅穴住居跡は、住居構造の基本は在地のものでありながら、関東系土師器をカマド構築材で使っている点で特徴的である。大天馬遺跡SI21号堅穴住居跡は、御駒堂遺跡でみられるような関東からの移民によってもたらされた文化的要素が在地集落にどのように取り込まれていったかを知る手がかりになると思われる。

註：平成21年度栗原市教育委員会大天馬遺跡確認調査成果について栗原市教育委員会からデータを提供していただいた。

V 後 沢 遺 跡

調査要項

遺跡名：後沢遺跡（宮城県遺跡地名表登録番号41072）

遺跡記号：YH

所在地：宮城県栗原市築館萩沢後沢

遺跡種別：古代の集落跡

調査原因：みやぎ県北高速幹線道路事業

調査主体：宮城県教育委員会

調査担当：宮城県教育庁文化財保護課

調査協力：宮城県土木部北部土木事務所栗原地域事務所 栗原市教育委員会

調査対象面積：約6,800m²

調査面積：約2,300m²（＊遺跡範囲確認のための隣接地含む）

調査期間：平成27年4月20日～4月30日（試掘調査）

平成27年5月15日～5月21日（確認調査）

調査員：千葉 直樹・黒田 智章・須田 正久

1. 遺跡の概要

後沢遺跡は、東西約100m、南北約200mの範囲の丘陵平坦面に立地し、現況は水田になっている。遺跡は平成26年3月に行われた宮城県教育委員会の分布調査で遺物が採集され、試掘調査が行われた。この時、古代の竪穴住居跡や時期不明の土坑、溝跡などが検出され、古代の集落跡として新規登録された。

2. 発見された遺構と遺物

今回の調査で発見された遺構は、A区で古代の竪穴住居跡1軒、試掘トレンチから時期不明の土坑4基、溝跡2条、掘立柱建物跡1棟を検出した(第10図)。そこから標高の下がる段丘面(45T~57T)では遺構は確認されなかった(第3図)。

遺物は整理用テンパコで1箱分出土している。その大半が、竪穴住居跡から出土した土師器と須恵器である。

(1) S11 竪穴住居跡(第11図 図版6・7)

A区西側中央に位置する。V層上面で検出した。西側は削平が強く、床面や周溝、掘方埋土が遺構検出面で確認された。煙道は確認されなかった。他の遺構との重複関係はない。竪穴住居跡カマド付近について一部掘り下げを行って調査した。

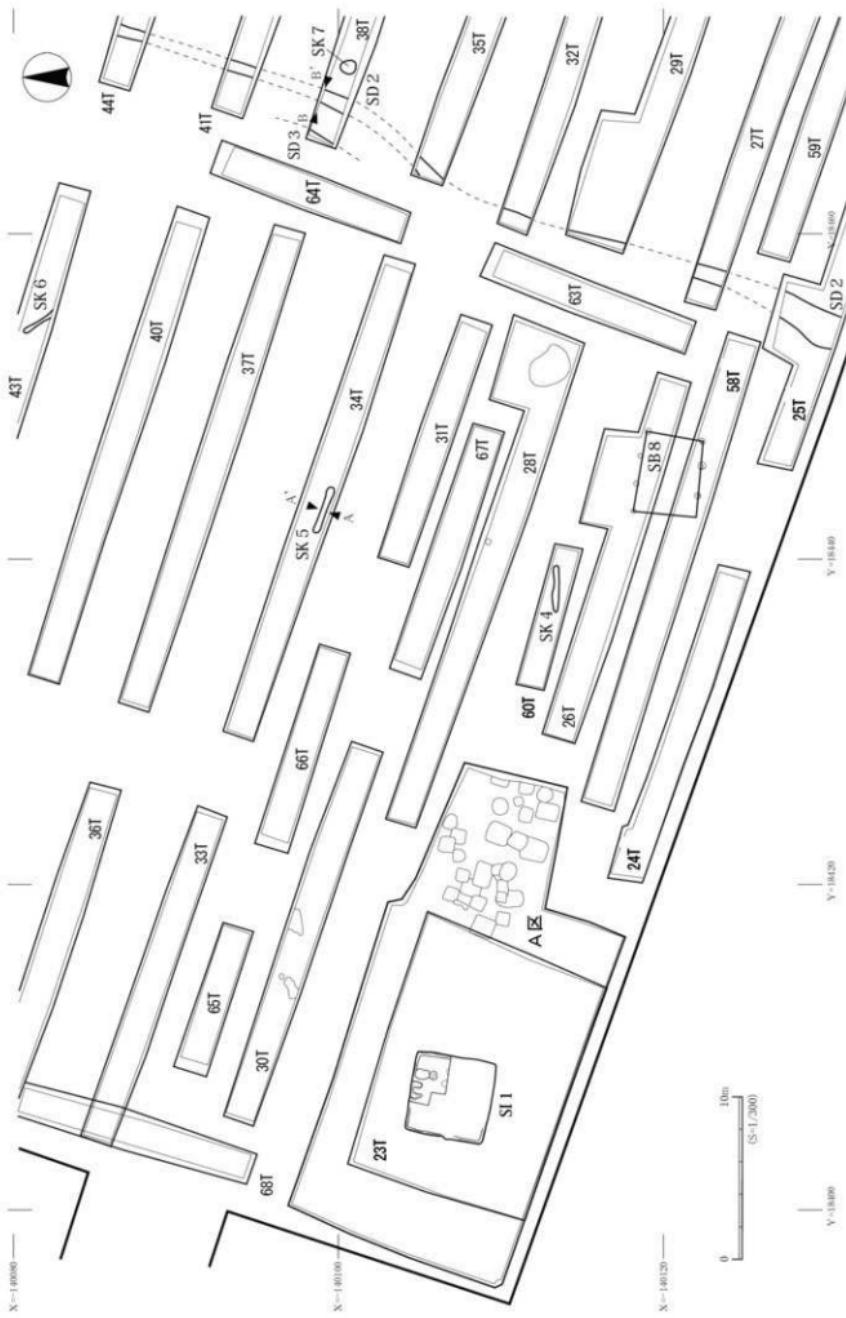
平面規模は、東西が北辺で4.9m、南北が東辺で5.0m、平面形は方形である。方向は、東辺でみると北で東に約9°偏している。堆積土は3層で、黒褐色シルトを主体とする。また、灰白色火山灰が住居跡西側に堆積している。

壁は、東壁で床面から10~15cm残存し、ほぼ垂直に立ち上がる。

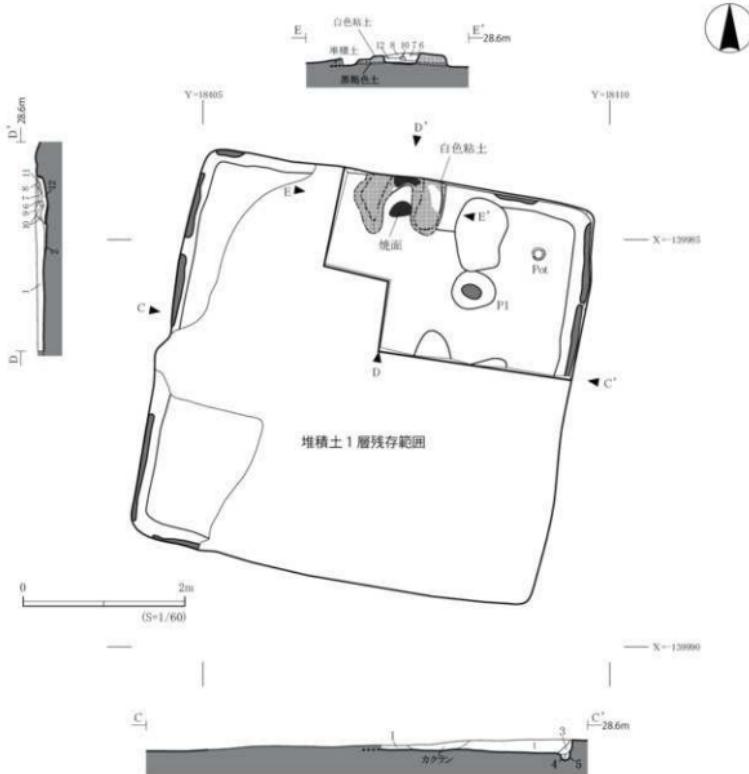
床面は、平坦で、掘方埋土を床にしている。主柱穴と考えられる柱穴を1個確認した(P1)。平面形は、長軸50cm、短軸45cmの楕円形で、柱痕跡は長軸20cm、短軸16cmの楕円形である。柱穴の掘方埋土は、地山ブロックを多く含む黒褐色粘土質シルトで、柱痕跡は、地山小ブロックを少し含む黒褐色粘土質シルトである。

カマドは、北壁中央に造られており、両側壁、煙道が残存している。燃焼部は、幅50cm、奥行き75cmである。底面は浅い皿状にくぼんでいる。燃焼部中央付近に直径約20cmの焼面がみられる。カマド本体は、白色粘土を積み上げて上部を構築している。右側壁は、長さ70cm、幅40cm、高さ15cm、左側壁は、長さ73cm、幅40cm、高さ10cmが残存している。燃焼部内の堆積土は、地山小ブロック、焼土ブロックを多く含む赤褐色または暗褐色粘土質シルトで、カマド構築材の崩落土である白色粘土小ブロックを含む。

周溝は、カマド部分以外は壁際を全周する。周溝掘方と壁材痕跡を検出した。規模は、上幅20~30cm、下幅12cm、深さ10cmで、断面形は、U字状である。掘方埋土は、地山ブロックを多く含む黒褐色粘土である。貯蔵穴は、カマドの東側、主柱穴(P1)に接する位置で確認した。長軸90cm、短軸60cmの楕円形で、堆積土は地山小ブロック、白色粘土ブロックを含む黒褐色シルトである。



第10図 後沢遺跡確認調査 A区と遺構配置



層	土色	土性	混入物など	備考
1	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	地山粒を少し含む。	住居堆積土1
2	暗褐色 (10YR3/3)	粘土質シルト	Ø2mm~5mmのロームを含む。	住居堆積土2
3	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	地山小ブロックを含む。	住居堆積土3
4	褐色 (10YR4/4)	粘土質シルト	地山ブロックを多く含む。	周溝壁材痕跡
5	褐色 (10YR4/4)	粘土質シルト	地山ブロックを多く含む。	周溝側方埋土
1	黒褐色 (10YR3/1)	粘土質シルト	白色粘土粒、地山粒を含む。	カマド自然堆積
2	褐色 (10YR4/4)	粘土質シルト	地山粒を含む。白色粘土ブロックを含む。	カマド自然堆積
3	黄褐色 (10YR8/6)	粘土質シルト	地山小ブロック、白色粘土ブロックを多く含む。	カマド自然堆積
4	灰褐色 (10YR8/1)	粘土質シルト	白色粘土ブロック主体。	カマド崩落土
5	浅黃褐色 (10R8/3)	粘土質シルト	白色粘土と地山ブロックの混合土。	カマド崩落土
7	褐色 (10YR4/4)	粘土質シルト	地山ブロックを多く含む。	カマド堆積土
6	暗赤褐色 (5YR3/6)	粘土質シルト	地山小ブロック、粒、燒土粒を多く含む。	カマド堆積土

第11図 後沢遺跡S11竪穴住居跡 平面・断面



No.	種別	層位	口径	底径	器高	残存	特徴	写真図版	登録
1	須恵器・壺	堆積土1	9.7	(L4)	底部	外側: ロクロナデ 内面: ロクロナデ 底面: 回転ヘラ切り	8-2	R-15	
2	土師器・甕	床 面	12.9	(7.7)	口縁部~全体上部	外側: ヨコナデ→ヘラケズリ 内面: ヘラナデ→口縁部ヨコナデ	8-1	R-16	

第12図 後沢遺跡S11竪穴住居跡 出土遺跡

遺物は、床面から土師器甕（第12図2）、堆積土から須恵器壺（同図1）と蝶石器（図版8-3）が出土している。

（2）SB8掘立柱建物跡

26トレンチと58トレンチの東側に位置する（第10図）。他の遺構との重複関係はない。桁行3間、梁行1間の東西棟である。平面規模は、桁行が南側柱列で4.8m、柱間寸法は、西から1.5m、1.7m、1.5mで、梁行は西側柱列で3.6mである。方向は西妻でみると北で8°東に偏する。柱穴を7個確認した。柱痕跡は3カ所で確認した。掘方は直径25~35cmの円形で、埋土は地山ブロックを含む暗褐色粘土質シルトである。柱痕跡は、直径15cm程度の円形で、堆積土は暗褐色粘土質シルトである。遺物は出土していない。

（3）土 坑

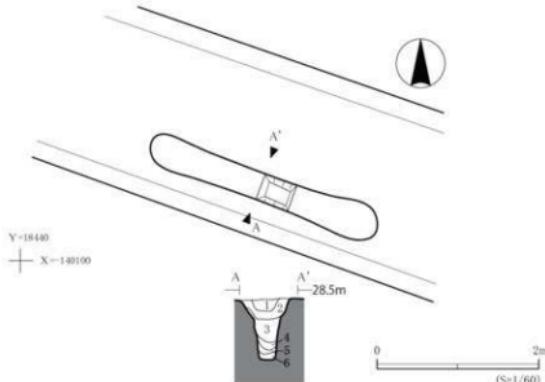
溝状で堆積土が黒褐色のSK4・SK5・SK6と円形で堆積土が暗褐色のSK7がある（第10図）。

[SK4土坑]

60トレンチ東側に位置する。平面形は、長軸2.8m、短軸0.4mで、東西に長い溝状である。堆積土は黒褐色粘土質シルトを主体とする。遺物は出土していない。

[SK5土坑]

34トレンチ中央に位置する。平面形は、長軸2.9m、



層	土色	土性	混入物など	備考
1	黒色 (10YR2/1)	シルト	地山粒を少し含む。	自然堆積
2	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	地山ブロックを多く含む。	自然堆積
3	褐色 (10YR4/4)	粘土質シルト	地山ブロックを非常に多く含む。	自然堆積
4	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	地山ブロックを含む。	自然堆積
5	褐色 (10YR4/4)	粘土質シルト	地山ブロック主体。	自然堆積
6	黒褐色 (10YR2/3)	粘土質シルト	地山小ブロックを少し含む。	自然堆積

第13図 後沢遺跡S K5 土坑 平面・断面

短軸0.4mで、東西に長い溝状である。一部を掘り下げて調査したところ、上幅60cm、下幅20cm、深さ76cmで、断面形は細いロート状である（第13図）。堆積土は黒褐色粘土質シルトと地山ブロックを多く含む褐色粘土質シルトを主体とする。遺物は出土していない。

[SK6土坑]

43トレンチ東側に位置する。平面形は、長軸1.9m以上、短軸0.3mで、北西-南東に長い溝状である。堆積土は黒褐色粘土質シルトを主体とする。遺物は出土していない。

[SK7土坑]

38トレンチ西側に位置する。平面形は、直径0.9mの円形で、堆積土は暗褐色シルトである。遺物は出土していない。

このほかA区東側では、時期不明の円形または方形の土坑が多数検出された。埋土から生焼けの木片や風化が進んでいない炭が出土しており、近世以降の新しい時期のものと思われる。もとの地権者の話によると、農地整備前にはA区周辺は墓地であったそうである。これらの土坑はその時の墓穴の可能性がある。

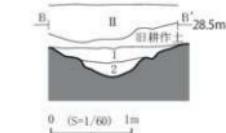
(4) 溝 跡

25トレンチから44トレンチで南北方向に延びる溝跡を2条検出した（第10図）。

[SD2溝跡]

25トレンチ～44トレンチの範囲で確認した。南北方向の溝跡でトレンチ外にさらに伸びる。残りの良い

38トレンチで一部を掘り下げて調査した。検出長は約48.0mである。上幅1.6m、下幅0.3m、深さ0.4mで、断面形は皿状である（第14図）。堆積土は2層で、上層は暗褐色粘土質シルト、下層は黒褐色粘土質シルトで地山崩落土を含む。遺物は出土していない。



層	土色	土性	混入物など	備考
1	暗褐色 (10YR3/3)	粘土質 シルト	地山小ブロック・粒を 少し含む。	自然堆積
2	黒褐色 (10YR2/2)	粘土質 シルト	地山粒を少し含む。	自然堆積

第14図 後沢遺跡SD2溝跡断面

38トレンチ西壁際で溝跡の東側を検出した。南北方向の溝跡でトレンチ外にさらに伸びる。検出長は1.7m、上幅は0.3m以上である。堆積土は暗褐色粘土質シルトである。遺物は出土していない。

3. 考 察

(1) 遺物について

特徴が分かり、時期のある程度検討できる資料として、SI1竪穴住居跡床面出土土器壺と堆積土出土須恵器壺がある。

土器壺（第12図2）は、口縁部から同部上半が残存し、非クロクロ調整で、体部上半が強く張り、頸部で明瞭に屈曲して口縁部が開く器形である。器面は、口縁部の外面はヨコナデ、胴部外面は斜め方向のケズリ、内面はナデで調整されている。色調は橙色である。須恵器壺（第12図1）は、口縁

部が欠損し、詳細な器形は不明であるが、器高が低く、体部下半が軽く膨らみ、底部が広い逆台形の器形である。調整は、内外面をヨコナデし、底部は回転ヘラ切り後未調整である。

このような特徴をもった土器の類例として、土師器壺については大天馬遺跡SI21堅穴住居跡、御駒堂遺跡22号住居跡出土土器などがある。須恵器壺については栗原市大境山遺跡2号住居跡、佐内屋敷遺跡第6号住居跡出土土器がある。これらの土器については、8世紀前半～中頃に位置付けられている。本遺跡出土土器についてもおおむねこの時期に相当するものと考えられる。また、壺については、法量は異なるものの、器形、器面調整、色調など大天馬遺跡SI21住居跡出土土師器壺に特徴がよく似ていることから、全体の特徴は不明であるが、この土器についても関東系土師器に分類されると考えられる。

なお、堅穴住居床面出土の土師器壺は、胴部過半を欠損し、カマド右側の床面から口縁部を上にした状態で出土した。同様の例は、栗原市経ヶ崎遺跡SI6、SI21、SI40住居跡で確認されている。これについて大形の壺を置く器台として転用された可能性が指摘されている（高清水町教育委員会2000）。本例はこの新事例にあたると考えられる（註）。

（2）遺構について

検出された遺構について年代を中心に検討したい。堅穴住居跡の年代は、前述の出土土器の検討から、8世紀前半から中頃と考えられる。詳細な年代については床面出土土器が土師器壺1点のため検討できない。また、堆積土に灰白色火山灰があることから少なくとも降灰前に廃棄され、住居廃絶後は100年以上廃屋または窪地のままになっていたと考えられる。構造についてみると、一辺の長さが約5mの方形で、カマドはほぼ真北に造られる。煙道は検出されていない。遺構の残存状況を考慮すると削平された可能性が高い。主柱穴は1個検出しており、位置を考えると主柱は4本と推定される。周溝はカマド部分を除き全周すると推定され、壁材痕跡が検出されている。カマドは、白色粘土で構築されている。このような特徴は、これまで大天馬遺跡の調査で8世紀代の中型堅穴住居跡とされたものと基本的に類似している。

時期不明の土坑と溝跡については、堆積土が黒褐色のもの（SK4・SK5・SK6）と暗褐色のもの（SK7・SD2・SD3）に大きく分かれる。

黒褐色土のものは堆積土の特徴がSI1堅穴住居跡と類似することから古代以前と考えられる。SK4・SK5・SK6土坑は、平面形が溝状で、SK5では断面形が細いロート状であることが確認された。同じような土坑は、栗原市長者原遺跡、川崎町前田遺跡、藏王町鍛冶沢遺跡などで検出されており、陥し穴と考えられている。この形態の陥し穴は縄文時代から古代まで存在する可能性が指摘されている（田村1987、平野2007）。本遺跡の遺構分布をみると、堅穴住居跡の周囲で陥穴が検出されている。居住域に近接して陥し穴が造られるとは考えにくいことから、おそらく陥し穴は古代以前のもので、堅穴住居跡と時期を異にすると考えられる。

一方、暗褐色土のものについては時期不明であるが、暗褐色土が古代の遺構検出面であるV層より上のⅢ層由来と推定されること、SI1堅穴住居跡にはⅢ層由来と考えられる堆積土がみられないこと、掘立柱建物跡の柱穴が円形で小さいものであることを考えると中世以降である可能性が高い。

(3) 奈良時代の集落の様相について

検出された古代の遺構は堅穴住居跡1軒で、ほかに古代の遺構と確実に分るものはない。検出された遺構が少ないため集落構成を論じえないが、栗原市大天馬遺跡、佐内屋敷遺跡、大門遺跡と同様に遺構が閑散としていることと堅穴住居跡の構造を考えると、この地域の8世紀代の一般集落である可能性が高い。

(註) 大天馬遺跡でSI21堅穴住居跡床面から出土した底部が欠損した土師器壺（本報告書p11第7図2）も、カマド右側の床面から口縁部を上にした状態で出土した。住居廃絶時に不要な土器を廃棄した可能性もあるが、出土状況を考慮すれば器台として転用された可能性がある。

VI まとめ

1. 大天馬遺跡は、栗原市志波姫堀口大天馬ほかに所在し、追川とその支流によって開析された丘陵上に立地する。遺跡範囲は東西約450m、南北約300mで、調査対象範囲はこの中の北東部にあたり、現況は水田となっている。今回の調査で、遺跡は北側から東側に広がる狭い階段状の段丘には広がらないことが明らかとなった。一方、南東から南に広がる丘陵平坦面では遺構が遺跡範囲外にさらに伸びる可能性がある。
2. 大天馬遺跡の今回の調査では、8世紀中頃の堅穴住居跡1軒を検出した。出土遺物は、堅穴住居跡から土師器壺、塊、小型鉢、甕が出土している。甕はカマドの芯材に使われたもので、関東系土師器に分類されるものである。
3. 後沢遺跡は、栗原市築館萩沢後沢に所在し、追川とその支流によって開析された丘陵平坦面に立地する。後沢遺跡の範囲は、東西約100m、南北約170mで、調査対象範囲はこの中の南部にあたり、現況は水田となっている。丘陵北側から東側の狭い階段状の段丘には広がらないと推定される。一方、西側から南側については遺跡範囲の外側に遺構がさらに広がる可能性がある。
4. 後沢遺跡の今回の調査では、8世紀前半から中頃の堅穴住居跡1軒と時期不明の掘立柱建物跡1棟、土坑4基、溝跡2条などを検出した。出土遺物は、堅穴住居跡から須恵器壺、土師器甕が出土している。甕は関東系土師器に分類されるものである。
5. これまで発見された堅穴住居の構造と出土遺物から考えると、大天馬遺跡と後沢遺跡は8世紀代に営まれた一般集落と捉えられる。その中に関東系土師器を使用する集団が含まれていたと推定される。

【引用・参考文献】

- 井上克弘・山田一郎 1990 「東北地方を覆う古代の珪長質テフラ“十和田一大湯浮石”の同定」『第四紀研究29』
- 氏家和典 1981 「東北土師器の形式分類とその編年」『歴史』第14輯 東北史学会
- 加藤道男 1989 「宮城県における土師器研究の現状」『考古学論叢Ⅱ』（岸沢長介先生還暦記念論文集刊行会）pp.277～330
- 栗駒町教育委員会 1972 「鳥矢ヶ崎古墳群発掘調査概報」（栗駒町埋蔵文化財報告）
- 栗駒町教育委員会 1995 「長者原遺跡」（栗駒町文化財調査報告書第3集）
- 栗原市教育委員会 2006～2011 「伊治城跡」（栗原市文化財調査報告書第1、4、7、9、11、13集）
- 白鳥良一 1980 「多賀城出土土器の変遷」（多賀城跡調査研究所研究紀要7）
- 瀬峰町教育委員会 1983 「大境山遺跡」（瀬峰町文化財調査報告書第4集）
- 瀬峰町教育委員会 1988 「下津沢Ⅱ遺跡」（瀬峰町文化財調査報告書第6集）
- 高清水町教育委員会 2000 「経ヶ崎遺跡・親音沢遺跡」（高清水町文化財調査報告書第2集）
- 田村壯一 1987 「陥し穴状構の形態と時期について」『紀要』（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 佐藤敏幸 2007 「第II章 東北・北海道における6～8世紀の土器変遷と地域の相互関係 vi. 宮城県北部・沿岸部」「古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究」平成15年度～平成18年度科学研究費補助金（基盤研究B）研究成果報告書
- 染館町教育委員会 1988～2001、2004、2005 「伊治城跡」（染館町文化財調査報告書第1～14、17、19集）
- 染館町教育委員会 2003 「嘉倉貝塚」（染館町文化財調査報告書第16集）
- 染館町教育委員会 2005 「鰐沢遺跡」（染館町文化財調査報告書第18集）
- 染館町史編纂委員会 1976 「染館町史」
- 鶴間 正昭 2009 「南武藏・相模の土器様相と地域間交流」『古代社会と地域間交流—土師器からみた関東と東北の様相一』
- 東北古代土器研究会福島・宮城支部 2005 「東北古代土器集成—古墳後期～奈良・集落編—〈宮城〉」研究報告2
- 東北古代土器研究会福島・宮城支部 2008 「東北古代土器集成—須恵器・窯跡編—〈陸奥〉」研究報告3
- 平野 祐 2007 「東北地方南部における绳文時代陥し穴の形態と地城色」『紀要XVI』（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 宮城県教育委員会 1979 「宇南遺跡」（宮城県文化財調査報告書第59集）
- 宮城県教育委員会 1980a 「大門遺跡」「東北新幹線関係道路調査報告書II」（宮城県文化財調査報告書第62集）
- 宮城県教育委員会 1980b 「木戸遺跡」「東北自動車道遺跡調査報告書III」（宮城県文化財調査報告書第69集）
- 宮城県教育委員会 1980c 「山上ノ遺跡」「東北自動車道遺跡調査報告書III」（宮城県文化財調査報告書第69集）
- 宮城県教育委員会 1982 「御胸堂遺跡」「東北自動車道遺跡調査報告書VI」（宮城県文化財調査報告書第83集）
- 宮城県教育委員会 1983 「佐内屋敷遺跡」「東北自動車道遺跡調査報告書VII」（宮城県文化財調査報告書第93集）
- 宮城県教育委員会 2001 「淀遺跡」「名生館遺跡ほか」（宮城県文化財調査報告書第187集）
- 宮城県教育委員会 2002 「嘉倉貝塚」（宮城県文化財調査報告書第192集）＊みやぎ県北高速幹線道路開通遺跡調査報告書Iにあたる
- 宮城県教育委員会 2009 「原田遺跡・下萩沢遺跡」（宮城県文化財調査報告書第219集）
- 宮城県教育委員会 2012 「大天馬遺跡」（宮城県文化財調査報告書第231集）
- 宮城県教育委員会 2014a 「入ノ沢遺跡」「平成26年度宮城県遺跡調査成果発表会 発表要旨」
- 宮城県教育委員会 2014b 「御胸堂遺跡」「平成26年度宮城県遺跡調査成果発表会 発表要旨」
- 村田晃一 2000 「飛鳥・奈良時代の陸奥北辺－移民の時代－」『宮城考古学』第2号
- 村田晃一 2005 「7・8世紀における陸奥北辺の様相—宮城県域を中心として—」『日本考古学協会2005年度福島大会シンポジウム資料集』

写 真 図 版



大天馬遺跡遠景(南東から)



確認調査E区全景(西から)

図版1 大天馬遺跡遠景・確認調査E区全景



確認調査E区全景(西から)



5Tトレーニチ(西から)



6・7・9Tトレーニチ(東から)



13～19トレーニチ(西から)

図版2 大天馬遺跡確認調査E区全景・試掘トレーニチ



S 121 竪穴住居跡(南東から)



S 121 竪穴住居跡(南から)



S 121 竪穴住居跡西側東西断面(北から)



S 121 竪穴住居跡カマド断面(西から)



S 121 竪穴住居跡断面(南西から)

図版3 大天馬遺跡E区 S 121 竪穴住居跡



カマド稼出状況(南から)



カマド左側壁(南から)



カマド右側壁(南から)



土師器塊 床面出土状況(南から)



土師器塊 P3出土状況(南から)

図版4 大天馬遺跡E区 S121竪穴住居跡



1: 坯 第7図1、2:鉢 第7図3、3:壺 第7図2、4:甕 第8図1、5:甕 第8図2、6:甕 第8図3、7:甕 第8図4、8:甕 第8図5

図版5 大天馬遺跡E区 S121竪穴住居跡出土土器



後沢遺跡遠景（北から）



確認調査A区全景(南西から)

図版6 後沢遺跡遠景・確認調査A区



S11竪穴住居跡(南から) 住居跡中央左の白い堆積土が灰白色火山灰



S11竪穴住居跡断面(北から)



S11竪穴住居跡 周溝断面(北から)



S11竪穴住居跡カマド(南から)



S11竪穴住居跡カマド断面(西から)



S11竪穴住居跡土器裏 床面出土状況(南東から)



60レンチSK4土坑(西から)

図版7 後沢遺跡 S11竪穴住居跡・SK4土坑



34トレンチ SK5土坑(東から)



34トレンチ SK5土坑断面(東から)



43トレンチ SK6土坑(西から)



38トレンチ SK7土坑、SD2、SD3溝跡(南東から)



38トレンチ SD3溝跡断面(南から)



21トレンチ(西から)



46トレンチ(西から)



3



25トレンチ(西から)



57トレンチ(東から)



3



2

1:土師器甕 第12図2、2:須恵器 壕 第12図1、3:礫石器 SI1堆積土1層

図版8 後沢遺跡 SK5~7土坑、SD2・3溝跡、SI1竪穴住居跡出土遺物

報告書抄録

宮城県文化財調査報告書第241集

大天馬遺跡・後沢遺跡

—みやぎ県北高速幹線道路関連遺跡調査報告書Ⅱ—

平成28年3月19日印刷

平成28年3月25日発行

発行 宮城県教育委員会
仙台市青葉区本町三丁目8番1号
印刷 株式会社 東北プリント
仙台市青葉区立町24-24
